

# [3] ディズニーの国の『白鳥の湖』、そして『火の柱』 ～アメリカン・バレエ・シアター日本公演

1989年9月22日 東京新聞 夕刊

アメリカン・バレエ・シアターの「白鳥の湖」は、これまでのどんな「白鳥」とも違って、快い意外性にみちみちていた。

まずは一幕の舞台装置と衣装。明るいピンクと緑を基調としたデザインは、まるでフランスのベル・エポックを軽快なパステル調にしたようで、従来の宮廷風とまったく違う。

次いで二幕の初め。白鳥たちのコール・ド・バレエが登場するはずのところ、なんと大きな白鳥の置物が、細い金糸を散らしたごく薄い紗幕を背景に、列をなして滑るように舞台を往復する。遠景の湖上に白鳥が映し出されるというのは見たことがあるが、これにはびつくりした。

それというのも、見る前から、アメリカン・バレエ・シアターの、すつくと上体を伸ばした硬質な踊りだと、二幕のコール・ド・バレエは、おそらく陶器がガラスで造形したモダン・アートの白鳥のようであるに違いないと想像していたらその通りの置物だったからである。

オデットも白鳥たちも、ふくらはぎまでの長さのセミ・ロマンティック・チュチュを着て、髪には見慣れた白い羽根飾りが無い。白鳥というよりは人間の娘たちのような。

中間色の中世風タピスリーを背景に強烈な原色が入り乱れる三幕の後、四幕には数人の黒鳥が加わって、白と黒とが幾何学的な構図を描き、物語性を排除した抽象バレエを見ているよう。その代わりというわけでもあるまいが、三幕のオデールは黒鳥ではなく、二幕と同じ白い衣装。白と黒に精神的な意味を持たせていないことは、あきららかである。

## ●古典的振りなのに

しかし私が一番驚いたのは、実はそのような外面的な演出のあれこれではなく、振り付けそのものが従来の古典的なそれとほとんど変わっていないということだった。バリシニコフが芸術監督になって、演出・振り付けが大幅に変化していると聞いていたが、本当に、

# [3] ディズニーの国の『白鳥の湖』、そして『火の柱』 ～アメリカン・バレエ・シアター日本公演

1989年9月22日 東京新聞 夕刊

不思議なほどロシア・バレエそのままの振りなのである。新しい曲、踊りといえば、三幕の初め、前うしろの双面をつけた三人の踊りがルネッサンス風の宮廷舞踊を思わせて、斬新かつオリジナル。それを除けば、根本的な変化はほとんどないと言っていい。

それにもかかわらず、舞台を見て受ける感じが、従来の「白鳥の湖」とまったく違うのであった。これは何だろうか。一幕から二幕へと休憩なしに流れ込み、その軽やかで、夢見るように幻想的な、しかも澁刺たる生命感にあふれた舞台に魅せられ、納得しつつ、私は考え続けていた。そしてオデットと王子の愛のパ・ド・ドウで、二人が寄り添った最も感動的な動きの最中に、突然、ひらめいたのである、これはディズニーだ！

薄暗くて、おどろおどろしくて、とても残酷なグリム童話を、ディズニー映画というあの果てしなく健康的で楽天的なファンタジーに変えたもの、それと同じ種類の精神エネルギーが、アメリカン・バレエ・シアターの「白鳥の湖」にはみなぎっている。それは豊かで、明るくて、カブよくて、とても趣味の良い世界ではあるが、しかしもっと奥深く、もっと繊細な情緒に富んだ「白鳥の湖」を求めることもできるだろう。

「ジゼル」といい、「ラ・シルフィード」といい、「白鳥の湖」といい、十九世紀に作られた古典バレエの名作には、人間と人間でないものが交じりあう幽明の境地を表現したものが多し。ポアント（トウ・シューズ）の発明と習得はそのためだった。

## ●異形ではなく、人間

だが、アメリカン・バレエ・シアターの「白鳥の湖」は、白鳥という異形のもの、バレエではなく、存在感のある人間のドラマなのである。二幕の初めの白鳥から娘への変身の部分で置物を使ったのもそういうことだろう。つまり白鳥は置物で表現し、踊り手はもっぱら人間を踊るといわけだ。

ここに見られるのはおそらく、アメリカ文化の源流ともいべきひとつの精神性で、それはすなわちコー

# [3] ディズニーの国の『白鳥の湖』、そして『火の柱』 ～アメリカン・バレエ・シアター日本公演

1989年9月22日 東京新聞 夕刊

ロッパ文化の土台にある「歴史」という重しからの解放、もしくはその喪失によるものである。一九二〇年代のアメリカの文化人たちが自らを「デラシネ（根無し草）」と感じた、それと同じものが、この「白鳥の湖」にはまったく違う形で表現されているのではないだろうか。舞踊もまた、これを実践する人が生きている現実と深く結びついているのだと、改めて感じ入った。

## ●リアルにして優雅

別の日に「火の柱」を見て思ったのも、根本はそれと同じことだったが、これはまた、ひどく趣の異なる作品だった。

過ちから結婚制度の外で子供を生まなければならなくなった娘に、冷たくのしかかる社会の重圧というテーマは、古来繰り返されてきたものだが、その暗さ、厳しさがヨーロッパ文化の表現ともひとあじ違って、アメリカ文学の傑作ホーソンの「緋文字」の絶望感に通じるものがある。

人間劇というよりはむしろ心理劇であるこの作品では女性舞踊手はポアントで踊ってはいるものの、男女ともに衣装はリアリステイックな日常服で、振り付けも男性が女性を持ち上げるリフトはあるが、古典バレエに特有の回転や跳躍の見せ場はほとんどない。それでいて、まことに優雅で緊張感のある動きで、はからずも一カ月ほど前に見た「現代舞踊展」（東京新聞主催）のなかの「再会」（金井美三枝作品）を思い出した。

「白鳥の湖」にせよ、「火の柱」にせよ、やたら陽気な「パリのよろこび」にせよ、これほど多様なレパートリーを演じなくてはならないアメリカン・バレエ・シアターのメンバーは、現代において何をどのように踊るべきかという問題を、一人一人が根本から問いたださずにはいられないに違いない。

男性ソリストのなかの何人かが、バリシニコフを彷彿とさせる上半身の動きを見せて、しつかり盗んだな、と思って嬉しかった。